

16 植民地起源都市ジャカルタの性格変遷

——極集中の意味——

キーワード：ジャカルタ、歴史、中央集権

大 橋 厚 子*

Historical Development of Jakarta: A Capital with Centralized Power

Key Words: Jakarta, history, centralization of power

OHHASHI Atsuko

- | | |
|--|---|
| 1. はじめに | 4. 近代的植民地蘭領東インドの首都として (1870 年-1942 年) |
| 2. 東南アジア港市国家の一変種として
オランダ東インド会社商館ネットワークの中心都市として (1619 年～
18 世紀半ば) | 5. 大日本帝国陸軍第 16 軍占領地の首都として (1943 年-1945 年) |
| 3. 世界市場向け産物の集荷・輸出独占
政体の首都として (18 世紀半ば～
1870 年) | 6. インドネシア共和国の首都—再び政
経未分化な独占政体の首都として
(1945 年-) |
| | 7. おわりに |

1. はじめに

インドネシア共和国の首都であるジャカルタの歴史、特にその通史については、従来多くの書物・論文が執筆されてきた。本稿もまたジャカルタの歴史を概観するものであるが、そのねらいは、従来の通史が明示してこなかった時代毎の都市の性格を、主に社会経済史の側面から描くことにある。またオランダ植民地期にバタビアと呼ばれたこの都市で生まれた生活文化にも比較的多くの紙数を割くが、近現代インドネシアの政治文化に影響を与えたこの生活文化の検討が、今後のジャカルタの発展を展望するにあたり、新しい視点を提供すると考えられるためである。

* 名古屋大学大学院国際開発研究科・助教授

バタビアは、16世紀に成立したポルトガル領マラッカ、スペイン領マニラに続いて、17世紀初めという東南アジアでは比較的早期に成立した植民地都市である。しかもマニラ同様、建設当時から現在まで何らかの政体の中心都市として機能し続けており、南～東アジアにおいては例外的な植民地起源都市であると言える。とはいえバタビアは、植民地期にオランダ人がイメージしたような永遠の都ではなく、成立以来、幾度かの危機を乗り越え性格を変化させつつ生き残ってきた。本稿ではバタビア／ジャカルタの変化を追跡しながら、この植民地起源都市の性格を決定する要因を探り出してみたい。

2. 東南アジア港市国家の一変種そしてオランダ東インド会社商館ネットワークの中心都市として（1619年～18世紀半ば）

2.1. entrepot の時代（1620年代～1670年代）

植民地都市バタビアは、オランダ東インド会社（以下、VOCと略す）が東洋の貿易拠点とすべく1619年に建設したものであり、西欧文明の産物と言える。しかし東南アジア側から見れば、建設当初のバタビアは、この地域に長らく存在していた港市国家（port polity）の特徴を数多く備えていた。港市国家とは、東南アジア前近代史研究が生んだ概念で、物産の集散地である港町だけが独立した国家を形成し、その財政は交易——なかでも中継貿易への課税や手数料——で支えられていた。東南アジアでは7世紀頃から、このタイプの国家がマラッカ海峡付近に出現するようになった。マラッカ海峡は南シナ海交易圏とベンガル湾／インド洋交易圏とのインターフェイスと言え、海峡付近の集散港の存在は、中国・インド間の交易をスムーズにするために欠かせない要素であった。

17世紀初頭のVOCは、マラッカ海峡の東側に中国人商人との出会いの場である集散港を必要としていたが、当時出会いの場として機能していたイスラム港市国家バンテンは、VOCが支配下に置くには強力すぎたうえ、すでにイギリスが勢力を扶植していた。そこでVOCは、バンテンから60～70kmほど東の、バンテンの属領であった小さな港町ジャコトラを1619年5月に占領し、翌年バタヴィアと命名した。城塞の建設は1620年代に開始され、30年代半ばに一応の体裁を整えたのち、60年代に完成した。この城塞都市はオランダ本国のアムステルダムに範を求めたと言われている。

VOCがアジアで海上覇権を確立しつつあった17世紀半ばまでの時代には、城塞都市バタビアは、後背地であるジャワ島西部にとってほとんど異物であった。このことは、都市の城壁自体が、バンテン王国と東方のマタラム王国による攻撃から町を防衛

するために建設されたことに象徴される。都市内部に必要な労働力は、防衛上の観点から遠隔地の奴隷が好まれ、インドのマラバール、コロマンデル海岸、ビルマさらに東インドネシアなどから輸入された。そして城壁内にはヨーロッパ人、印欧混血児、中国人、日本人、マラバールの人々、東インドネシアのバンダ島から来た人々が住んでいた。人口比では中国人が多く、ヨーロッパ人・日本人・中国人は城内で雑居していたと推測される。一方バンダ島以外のインドネシア海域出身者は、防衛上、城外に集落を造って居住するよう命令されていた。城塞内で話される共通語はポルトガル語であったが、ポルトガル語は当時の南～東アジア海域のリンガフランカであるとともに、インドより輸入された奴隷の母語であったと言われる。食糧である米は初めはタイ・ビルマから、この時代の後半にはジャワ島中東部から船で輸入された。さらにこの時期のパタビアは、VOCにとって最も利益を生み出す商館の一つであったが、その利益は東アジアの産物と東南アジアの産物の仲介貿易によって得られていた。

この様に、1670年代までの植民地都市パタビアは、領土志向を持たずに商館ネットワークの結節点として遠隔地交易に関心を向けており、この点で東南アジアの港市国家と類似した性格を持っていた。しかし政治・経済制度の側面ではオランダ本国に直結しており、従来の港市国家とはまったく異なるものであったと言える。

ところでパタビアは市民革命を経たオランダの建設した都市でありながら、都市内部の民主主義的な政治制度は形骸化していた。VOCにとってパタビアは拠点商館に過ぎず、VOC職員以外の自由市民のオランダ人は数が少ない上に経済力がなかった。政治・軍事的権力はVOC職員が握る一方で、経済的意味でのブルジョワジーの役割を果たしたのは政治力のない中国人であった。パタビア市には法律はなく、VOCとその職員の都合で物事はいかようにもなったという(Blusse 1983: 67-68, 71-72)。これはヨーロッパ都市の伝統とは明らかに異なっていたが、当時の東南アジア港市国家の統治形態とも幾分異なっていた。一般に東南アジアの港市国家の王は、都市の特定の区画に外国人を出身地ごとに集住させ、それぞれの集団に自治を許していたが、彼らの持つ自治権は、パタビアの外国人集団より大きかったと言えるのである。この17世紀パタビアの状況は、スハルト体制下のインドネシアを連想させる何ものかを含むが、この状況を作り出した要因の大きな部分は、オランダ東インド会社という金貸し資本の独占体が政経未分化のまま統治を行ったことに求められよう。

以上のような特徴をもつ城塞都市パタビアで、この時期の後半からメスティソ的生活文化の形成が開始されることになる。パタビア建設初期、すなわち1620・30年代のオランダ人の生活は、勤勉と質素そのものであったと言われる。とくに妻同伴を禁

じられていた VOC 下級職員は、修道僧さながらの生活を送った。午前 5 時半起床、洗面後の礼拝、6 時執務、7 時より朝食、食事は 30 分を限度とされ、8 時執務再開、11 時に休憩と昼食。食事の談笑は厳禁され、違反者には 1 シリングの罰金。昼食後は午後 6 時まで執務、夕食後は自由時間となったが、やがて就寝時間になると蠟燭を灯すことはもちろん、喫煙も厳禁された。城外への外出は日曜日と木曜日にだけ許可された。日曜日の礼拝は義務であり、違反するとやはり罰金であった。彼らが耐えたのは昇進が約束されていたためであったという。上級職員は妻を本国から同伴するか、帰国するまで家族生活を営まないのが原則であった。そこで私生活にアジア的な風習が入り込む余地はさほど大きくなく、その生活はオランダ式に質素でつましいものであったと言われる（松尾 1997: 31）。

しかしこの状態は 17 世紀半ばから変化を始める。新大陸の植民地都市と比較するならば、メスティソ的生活の成立要因は次のような点に求められるであろう。パタビアはアジア 4 大文明のうちの 2 つ、インド文明と中国文明のいずれもの影響を受ける位置にあり、しかもオランダ本国の農業や生活文化を移植することが生態的に難しい熱帯にあった。そこでオランダ人の生活は常にこの海域に展開する文明 / 文化に晒されていた。城塞内での日本人・中国人等との雑居もこれに拍車をかけたであろう。さらに 17 世紀半ばにはマタラム・バンテン両王国の脅威が小さくなり裕福な者は城外に屋敷をもてるようになったほか、VOC 上級職員の妻になる女性に、オランダ本国生まれでも少女期から長い間アジアで暮らしたクレオールが登場するようになる。

彼女たちは、アジアにきたオランダ人男性が女性を家庭内に閉じ込める習慣を採用したことも手伝って、アジアの王侯貴族の女性に等しい育成環境で育ち、同様の生活態度を身につけていた。すなわち豪華で見栄えを大切にした価値観を持ち、多くの奴隷に囲まれて自分たちは働かなかった。彼女たちは家具や宝石を大量に所有し、着飾り、ピクニックを楽しんだ。子育ては奴隷に任せられたので、子供が最初に覚えることばは奴隷の話すベンガリー語であったという。彼女たちは東南アジアの風習であるベーターチューイングをも習慣としていた。このような、パタビアの淑女達の非ヨーロッパ的な生活は、オランダ本国からパタビアに到着したばかりの紳士には衝撃的であり、既に 1640 年代に彼女たちの生活態度を批判した文書が存在したという。しかしその一方でこれらの女性は、婚姻関係を通じて有力なオランダ人男性を互いに結びつけるという重要な社会的役割を果たしていたのである。（Taylor 1983: 34-42）

ところでこの時期のパタビアは、文化の面でも未だ後背地に対する異物であった。初期のメスティソ文化におけるアジア風とは、ジャワ島土着の文化よりは中国風、イ

ンド風そして時には日本風の要素が強かったと言えるのである。

2.2. 世界市場向け産物積出港+ entrepot の時代 (1680 年代～ 18 世紀半ば)

1680 年頃、金銀比価が世界中でほぼ等しくなり、大航海時代は終焉を迎える。遠距離交易から利益を上げることが困難になった VOC は、インド、台湾、そして東南アジア大陸部にあった商館を閉鎖し、かわりにインドネシア海域における独占貿易を強化した。その主な対象は、スマトラ、ジャワ、モルッカ諸島の香辛料で、とくにスマトラを主な産地とする胡椒が中心であった。さらに VOC は、バタビア後背地での集荷独占強化のためにジャワ島西部で領土の拡大を開始し、18 世紀初頭にはジャワ島西部ほぼ全城を領土とした。そして藍、綿糸、胡椒、コーヒーなどを独占して安価に買い上げ、本国へ輸送した。この結果、バタビアは VOC 商館網の中心都市および集散港としての役割を急速に低下させる一方で、新たにジャワ島西部の内陸交通網のターミナルとしての機能を持つようになった。ジャワ島西部では、現在に続く幹線道路がこの時期に出現している。

この時代は交易拠点バタビアの繁栄の余韻が残る時期であり、またメスティソ文化の展開期でもあったが、VOC の貿易構造の変化を反映して、バタビアへの奴隷の主な輸入先がインド・ビルマからジャワ島以外のインドネシア海域へと変化し、次の時代の文化的変化の要因を準備することとなった。

3. 世界市場向け産物の集荷・輸出独占政体の首都として (18 世紀半ば～ 1870 年)

3.1. 東インド会社商館網の中心都市から植民地の首都へ (18 世紀半ば～ 1820 年代)

18 世紀半ばから 1870 年ころまでのジャワ島における社会経済的变化は、I. ウォーラステインの唱える「組み込みの時代」の変化に極めてよく似ている。また統治の側面では、この時代の前半部分である 1820 年代までのジャワ島は、18 世紀半ばにその大部分が VOC の植民地と化したのち、19 世紀初めの短期間のイギリス支配を経て、オランダ本国の直轄植民地へと変貌した。これらの変化にともなって植民地都市バタビアも大きく変貌することになる。

はじめに 18 世紀末の VOC 解散までの時期を概観すると、VOC は 18 世紀末までに貿易でイギリスに敗北し、インドネシア海域以外での影響力をほとんど失っていた。バタビアは集散港としての機能を完全に喪失し、ジャワ島の産物を集荷したのちオラ

ンダへ輸送する役割のみが残った。このため 1750 年代より、それまで貿易に投資されていた資金が、新たな投資先としてバタビア後背地の土地、農業、輸送業へと投入されるようになった。具体的にはバタビアの食糧需要を満たすための水田開拓、各種農園の開園、運河開削、現地人首長への前貸しなどである。これにともない内陸輸送システムは、現地人首長にかわってオランダ人および中国人が掌握して行くことになった。また以上のバタビアの機能変化にともなって、VOC は自らの利益を守るために、かつての出会い貿易の相手であった中国人の経済活動に対して統制を強化した。すなわち世界市場向け産物の密輸行為を厳禁する一方で、植民地内における輸送業者、小売商人、そしてバタビア郊外における近郊農業の経営者の役割を期待するようになった。この統制強化は、バタビアでは、1740 年の華僑虐殺事件、その後の中国人の城塞内居住の禁止、そして城壁の南側での中国人街の形成という形で顕現した。こうして城塞都市バタビアは、かつてアジアの貿易拠点に伸ばしていた触手を翻して、後背地に伸ばし始めたのである（大橋 1994b）。

VOC の貿易会社としての衰退は、バタビアのオランダ人に次のような変化をもたらした（Taylor 1983: 52-77）。すなわち職員が勤勉に働いても貿易のみでは経済的上昇が不可能になる一方で、VOC の領土支配と土地への投資によって、上級職員の経済基盤が土地とそこに住む住民の支配に移った。土地は相続可能であった。このためバタビアでは、VOC の役職・利権が縁故関係を通じてのみ配分されるようになり、本国より到着した新来のオランダ人男性は、能力の有無にかかわらず、バタビアでの縁故関係に組み込まれずには VOC の要職につくことが難しくなった。当時はオランダ本国でも衰退期の特徴としてのネポティズムが横行していたが、バタビアに特異な点はすでに触れた女性の役割であった。バタビアの淑女達は、結婚やその親族関係によってオランダ人男性同士を結びつける重要な役割を果たしており、18 世紀半ばのバタビアでは、女性を要とした名望家の家系が出現し、70 年代頃には女系で繋がりながら VOC の要職につく家系がはっきりとたどれるまでになったのである。

くわえてこの時期のバタビアでは先述のメスティソ的生活が最盛期に入っていた。ジャワ島西部の治安が良くなってくると、豪勢で貴族主義的な生活が郊外で営まれるようになった。VOC の有力職員は広大な荘園を持ち、その中にある巨大な屋敷で、多い場合には 200 ～ 300 人の奴隷を使用していた。広々とした部屋が多くあったほか。「2 棟の馬車用車庫と厩舎があって、20 頭の馬と 4 人乗りのブルリン型馬車が 3 台、フェアトンとシェエーズそれにシャレットが 1 台ずつ入っている。使用人には、御者、2 人のヨーロッパ人護衛兵、ヨーロッパ人コック、200 人の男女の奴隷がいる。荘

園内にはこのほか7頭の馬と3台シェーズそして何台かの馬車と荷馬車、何艘かのヨットと手漕ぎ船、七面鳥や牛、家鴨に鳩などの家畜小屋もある」(松尾 1997: 40-41)

以上のようなオランダ本国とはかけ離れた生活に、新来オランダ人は驚愕したようである。そしてこの時期のオランダ人のメスティソ的生活にはジャワ島の文化の要素が認められるようになる。例えば18世紀半ばのVOC職員のランクの区別には当時ジャワ島中部に残存していた王国の支配層の文化的要素が認められると言う。すなわちランクに従って、服装、日傘の色、馬車の種類、引き連れる召使いの数などが法律で定められた。また職員となり得る男性の地位がその家族を拘束し、たとえば上級商務員夫人の従者はX人などと政令によって決められていた。

ところで上流階級が郊外で生活することには、当時不健康な都市となっていたバタビアから逃れる意味もあったようである。18世紀後半のバタビアではヨーロッパ人の死亡率が異常に高まったほか、他の人々の人口も減少していた。当時のバタビアは18世紀前半と比べても活気を失い墓場のようにであったという。現在のところ死亡率上昇の原因は森林伐採の結果、土砂が川に流れ込んで運河がつまり、排水設備が機能しなくなったことが第一の要因であったと考えられている(ブリュッセイ 1983: 73-77)。

1799年にVOCは解散し、ジャワ島はオランダ本国の直轄領となったが、1806年にオランダはフランスに占領されたため、1808年にナポレオン主義者であるダーンデルスがジャワ総督として着任した。ダーンデルスは軍備強化、中央集権化政策を行ったほか、首都に関しては当時衰退の兆候が明らかであったバタビアからの遷都を考えていた。スラバヤなどが候補地に上がったが、財政難で実現できなかった。彼はそのかわりに城塞都市バタビアの東南のやや小高い土地に、ヨーロッパ人のためのヨーロッパ風の軍事都市ウェルトフレーデンを建設した。そして総督官邸、軍司令部、軍事基地を移転させた結果、バタビア在住ヨーロッパ人の84%がここに住むようになった。この都市にはこのほかヨーロッパ人用の社交クラブ、劇場がヨーロッパ式で建設された。1811年にジャワに上陸したイギリス東インド総督ラッフルズ(1811-16年在任)も統治機構の中央集権化およびバタビアの統治にはダーンデルスの方針を踏襲した。そしてウェルトフレーデンの北側にすむ中国人・マレー人を立ち退かせ、ここをヨーロッパ人居住区とした。その一方でバタビアの城壁は当局によって破壊され、旧城塞の内部では廃墟となる建物も現れた。またこの一帯は一転して中国人の町となった。この時期の共通語は、当時行政用語として採用されたマレー語であったが、この言語は東南アジア島嶼部のリンガフランカであり18世紀より徐々にバタビアに浸透して

いたものである。こうしてバタビアは遠距離交易の集散港・商館ネットワークの中心としてのシンボルを、最終的に消されたのである (Abeyaskere 1987: 48-59; 大阪市立大学経済研究所 1989: 142-146)。

ところで、総督ダーデルルスは強烈なヨーロッパ人優越意識をもっていたと言われるが、当時ヨーロッパからバタビアに渡った有力者は一様に自由主義的思想とそのコインの裏側であるヨーロッパ人優越意識を抱いていた。このため、バタビアに住むオランダ人のメスティソ的生活は、この時期に厳しい批判に晒されることになった。イギリス東インド会社ジャワ総督ラッフルズのオリビア夫人は、バタビアの上流階級婦人がみなカバヤとサロン (後のインドネシアの民族衣装) を着用しモンゴルの踊り子のように宝石類でやたらと身を飾っていること、ほとんどマレー語しか話せないこと、さらに飲酒、喫煙、さいころ賭博、キンマを噛むことに青ざめ、彼女らの生活をヨーロッパ風に矯正することに情熱を傾けたと言う (Taylor 1983: 99)。

3.2. オランダ植民地ジャワ島の首都として (1830 年～ 1870 年)

イギリスがアジア海域の貿易覇権を確立する 1830 年ころから、バタビアは国境線の中の土地と人を支配する近代的植民地オランダ領東インドの首都となった。植民地の領域はジャワ島に加えてスマトラ島、スラウェシ島などの一部であったが、植民地政庁の支配の中心はジャワ島であった。政庁は 1830 年代から 1870 年まで、ジャワ島のほぼ全土とスマトラ・スラウェシの一部で「強制栽培制度」を実施した。「強制栽培制度」とは、植民地政庁が現地人首長と配下の住民との関係を利用して住民に世界市場向け作物を栽培させ、その集荷と輸出を独占するものである。その対価は極めて安価であったので、オランダ本国は東インドから莫大な利益を引き出した。またこの政策のもとで住民に対する小売業をほぼ独占した中国人は植民地内部に強固な商業網を築くことになった。「強制栽培制度」は、政経未分化の独占体質の植民地政体が、南～東アジア海域で勢いを得た中国人商人・カントリートレーダーから、自らの経済的利益を守るために実施されたと考えられるが、この結果オランダ領東インドでは自由主義的政策は退潮し、バタビアは再び集荷と貿易を独占する政経未分化な政体の首都となったのである (大橋 1994a)。

この時代に関する社会経済史研究の焦点はこの「強制栽培制度」研究にあり、都市の研究は手薄である。バタビアもその例にもれず、研究書・概説書でもこの時期について詳しく触れたものはない。この時期にはジャワ島中東部でスマラン、スラバヤといった植民地都市が、それぞれの後背地のコーヒーや砂糖の積み出し港として成長を

遂げており、なかでも人口稠密な後背地をもつスラバヤは、19世紀半ばから人口においてバタビアを凌駕することとなった。しかし各都市間の関係は解明されているわけではなく、首都バタビアに集中された統治機能が未だ分権化していなかったことのみがわかっている。

このように概説や研究書に乏しいことは、当時のオランダ人および後代の歴史研究者が、この時期のバタビアを叙述するに値しないものとして認識していたことを窺わせる。この時期には旧城塞内部であるコタの空洞化が著しく、1844年の人口は5097人でうちヨーロッパ人は貧しいユーラシアン98人が住むのみであったという。またコーヒーを産するバタビア後背地は、18世紀初めから19世紀初めまでVOC／オランダ植民地政庁のドル箱であったが、この時期には数ある生産地の一つに転落した。さらにバタビア市の行政に対する植民地政庁権限がこの時期に一層強化されたことなどが、バタビアを魅力のない都市とした一因であるかもしれない。

しかしこの停滞的イメージが現実であったかどうかは検討の余地がある。第1に、現代の概説そして研究動向の枠組みは20世紀前半の価値判断に由来する時代区分から完全に自由ではなく、このため「強制栽培制度」期は、住民が苦しめられた暗黒の時代、魅力のない時代として個々の実証無しに性格付けられていた可能性がある。

第2に、この時期は、前代とは異なるメスティソ文化の揺籃期であったといえる。

バタビアのメスティソ文化を18世紀を中心に検討したテイラーは「強制栽培制度」期について、この文化は最盛期をすぎ徐々に退潮して行く過程に入ったとする。テイラーはその原因を、植民地政庁がメスティソ的生活の社会経済的基盤を揺るがす措置をとったことに求める。すなわち政庁は1825年に、オランダ領東インドの官吏はヨーロッパで学校教育を受けた者に限られる、という条例を公布し、49年にこの条例を再確認して以降遵守するようになった。このためバタビアの名望家家系は没落を開始する。さらに1859年には奴隷の輸入および使用が禁止されたため、大量の労働力を必要とする巨大な屋敷の維持が難しくなり、ヨーロッパ人は小規模で合理的な家庭経営をするようになった。すでに1858年のオランダ人の旅行記に、次のような記述が見られるという。「育ちのいいヨーロッパ人は今やカバヤ、サロン姿でカーペットの上に座って、サンバルをおかずに米飯を食べ、食後に寝てしまうようなことはなくなった。家屋は気候の許す限りヨーロッパ風に建てられ、ヨーロッパの家具調度品が備えられている。衣装にもヨーロッパの素材が使われ、ヨーロッパ風の仕立てがなされている。馬車もヨーロッパ製であり、食卓にもひんぱんにヨーロッパ料理とヨーロッパ酒が並ぶようになった」(松尾1997: 41-46)

しかしこの同じ時期にヨーロッパ人の社会的人間関係は旧態依然であったようである。すなわち、パタビアのヨーロッパ人の間で網の目のように張り巡らされた縁故関係につづることが、依然として社会的成功の第一条件であったのである。さらにヨーロッパ人が東インドに在住する期間だけ現地人女性と結婚生活をするニヤイ制度も、この時期に広範に発達したと考えられる（松尾 1997：42-44, 47-50）。

さらにインドネシア研究者である土屋健治と松尾大が追求したインドネシア国民文化の原型、すなわちパタビアを中心に流行したメスティソ文化は、ポルトガル・オランダ文化とジャワ文化の混交をベースとした文化であるが、その具体的事例の幾つかは、この時期のメスティソ的生活の中で形成されてきたといえる。すなわち東インドの風景画の作成と流通、インドネシア料理の原型とも言える蘭印料理の成立などはこの時期であった。さらに 19 世紀末から人気を博すマレー語小説の舞台もこの時期におかれている場合が多いといえる。

1830 年代から 60 年代にかけてのパタビア都市史は、いずれの側面からも本格的な研究の望まれる分野であると言えよう。

4. 近代的植民地蘭領東インドの首都として（1870 年-1942 年）

4.1. 自由主義の時代（1870 年-19 世紀末）

19 世紀後半、スエズ運河の開通や蒸気船の一般化に代表される科学技術の発達とともに、欧米列強の植民地獲得競争が開始された。オランダは 19 世紀末までにスマトラ西端とニューギニア島を除いて、ほぼ現代のインドネシアの領域までに拡大する。これにともなって官僚組織、人員も拡大することになった。そのなかで、1860 年代に「強制栽培制度」が徐々に廃止され、かわって 1870 年からは資本主義プランテーション企業が進出した。この 1870 年から 19 世紀末までは、植民地期の歴史家によって「自由主義の時代」と呼ばれている。経済面ではオランダ・イギリスなどの資本が主にジャワ・スマトラ島に投下され、コーヒー、砂糖、煙草、ゴム、キナなどが主に栽培された。こうしてオランダ領東インドでは植民地における統治と経済活動が初めて分離することになったのである。東南アジアでも 19 世紀半ば以降に植民地となった国では、この政経が分離した統治スタイルが一般的であった。しかしパタビアとその周辺の長い植民地の歴史のなかでは、この分離スタイルの方がむしろ例外であった。

この時期のパタビアについて特筆すべきは、首都としての行政機能の分散が始まったことである。総督府、総督官邸、官房局、農業省、芸術・教育省が、パタビアより

約 60km 南のバイテンゾルフに、鉄道局がバンドンに移転した。これに対してコタ地域（旧バタビア城塞都市内部）は、金融・保険・海運に関わる大企業、外国領事館などが立ち並ぶオフィス街、そして歓楽街へと変貌し、繁栄を取り戻したという。首都機能分散の要因としては、1)領土の拡大とともに官庁の規模・数が拡大したこと、2)オランダ本国は、ヨーロッパの中でも首都機能の分散に最も成功した国であると言われるが、この本国のモデルを採用したこと、そして3)鉄道・路面電車など近代的交通網が整備されたこと、などが考えられる。特にコタ地区の繁栄は、この地区に中部ジャワおよびバンドンに向かう鉄道のターミナル駅がおかれたこと、および近代的港湾タンジュンプリオク港が建設されたことと不可分であり、またバタビア市内およびバイテンゾルフにおける官庁の分散も路面電車の開通ゆえに可能となった（大阪市立大学経済研究所 1989：147）。

こうしてバタビアは、近代科学技術と産業資本に支えられた近代的首都としての外観を備え始めたといえよう。

この「自由主義の時代」は、インドネシア国民文化の原型であるメスティソ文化の確立期でもあった。メスティソ文化の興隆については土屋（1991）の研究に詳しいので、ここでは概略のみ記しておく。この時期のジャワ島諸都市ではオランダ、中国本国より多くの人々が流入して、「純粹」なオランダ人、中国人社会を形成するようになり、混血児は社会の周辺に追いやられた。その一方でジャワ島諸都市では 1880 年代より商業ベースの娯楽が成立し、経済的に困窮した混血児が商業娯楽の分野で生活の糧を得るようになって、メスティソ文化を広める役割を果たした。その具体例は、前述の風景画のほか、歌や踊り、劇、マレー語小説などである。これらはいずれも、由緒が定かでなく様々な文化が混交しており、誰のものでもないがゆえに誰もが受容できる文化として、オランダ領東インド中に広がっていった。

ところで、この商業娯楽の分野で興隆したメスティソ文化は、いわば切り売り可能な文化であり、日常生活と不可分の文化ではなかった。一方の 17 世紀のバタビアに起源を持つメスティソ的生活は、テイラーによれば、この時期には、ヨーロッパ人社会の中では家庭内、中小地方都市、プランテーションの中で縮小された形で維持されていたと言う（Taylor 1983: 114-134）。テイラーのように、メスティソ的生活の主体をヨーロッパ人および印欧混血児に限るならばその様に言えるであろう。しかし土屋によれば、ジャワの貴族層はこの時期に官僚化し、官僚制度の中での生き残りをめざして、オランダ的生活文化を取り入れ始めた。このことは、オランダ人から「原住民」と呼ばれたインドネシア人のある階層が、オランダ人の生活文化とともにメスティソ

的生活や社会関係をも取り入れ始めた可能性を意味する。そしてこの時期のパタビアの言語状況はこの可能性を象徴していた。パタビアの共通語はマレー語であったと言えるが、「原住民」の中にも学校教育などによってオランダ人の話す特権的言語であるオランダ語を話す者が、この時期より出現するようになったのである。

4.2. 帝国主義時代のオランダ領東インド首都—財政・金融・高等教育の中心地として（19世紀末-1942年）

20世紀初頭からオランダ領東インドも金融資本の時代に入ったようである。世紀の変わり目に「原住民」の困窮が顕著となったため、1901年にオランダ政庁は、1)住民の福祉の向上、2)地方分権の推進、そして3)キリスト教の布教を基本とする政策を打ち出した。いわゆる「倫理政策」の開始である。しかしこの政策を要請したのが本国の綿織物工業資本であったことが示すように、政策の目的は、東インドをオランダ本国の工業製品の市場とすることにあった。そしてそのため鉄道・灌漑などへの資本投下が行われたのである。また1910年代に列強の世界分割がほぼ終了する頃に、蘭領東インドも明確な領域を持つようになった。

パタビアは広大なオランダ領東インドの首都となった結果、オランダ人の民間人・官吏ほか、他の民族の人口も増え、1920年にはスラバヤを抜いて植民地内で人口第一位の都市に返り咲いた。植民地政府の官僚制は肥大しつづけたため、前時代から続く首都機能の分散も続行された。この時期にバイテンゾルフには農業・工業・商業省、バンドンには陸軍省と官営工業省が移転した。この結果パタビアの官庁街であるウェルトフレーデンには財務省、教育・宗教・工業省、蘭印参議会が残った。またパタビアのなかでは、海軍省がグヌンサハリ、公共事業省がモーレンフリートへと移転した。その一方でこの時期にパタビアに創設された機関に、法律学校、医学校などの高等教育機関がある。そこで1920年代にウェルトフレーデンおよびコタ地域周辺に存在した機能は、財政・高等教育、くわえて銀行・保険会社などの金融部門となった。これは本国の首都アムステルダムに類似しよう。さらに政治面では1908年から選挙による地方議会が開催されるようになり、パタビアはこの時期も西洋近代的首都へ変貌を続けていたと言える（Abeyaskere 1987: 88-99; 大阪市立大学経済研究所 1989: 147-149）。

この時期にオランダ人の生活はさらにオランダ的に変化した。1910年代にウェルトフレーデンの南（現在のメンテン地区）に高級住宅地の開発が行われたことに象徴されるように、オランダ人は本国と同質のオランダ人のみの社会を形成しはじめ、他

の民族に対して閉鎖的になっていった。オランダ人女性が多数渡航した結果、男性対女性の比が10対9となり、妾制度は完全に否定されるようになった。こうして血統的にオランダ人であってもメスティソ的生活態度を持つ人は軽蔑の対象となったのである（Abeyaskere 1987: 114-116）。混血児および彼らの担った商業ベースのメスティソ文化も、ヨーロッパ人社会から一層周辺化され、ついに「原住民」の文化と認識され始めた。そしてこの時期に勃興してきたインドネシア・ナショナリズムと結合し始め、「われらインドネシア人」の文化となっていくのである。とすれば次のような問いかけが可能であろう。テイラーは、ヨーロッパ人が「原住民」習慣を取り入れた結果、メスティソ的生活と社会関係が形成されたと考えているようだが、すでに見たように、形成期のメスティソ的生活はアジア風であってもジャワ風ではなかった。とすればメスティソ的生活および社会関係は、混血児の周辺化とともに、この時期の前後にあらためて「原住民」に受容された可能性はないであろうか。

5. 大日本帝国陸軍第16軍占領地の首都として（1943年-1945年）

日本軍は1942年3月にジャワ島を占領し、ジャワ島は第16軍の管轄下に入った。日本軍は戦争遂行のためにジャワ島を兵站と食糧基地とみなし、世界市場向け産物の生産と輸出を壊滅状態に陥れたうえ、剥き出しの暴力で食糧と労働力を収奪した。日本軍は、オランダ東インド会社・強制裁培制度期のオランダ政庁とは大きく性格をことにする政体であったが、政経がほとんど未分化であり、かつ貿易を独占する政体であった点では同じである。首都機能の問題についてみると、日本軍は、バタビアをジャカルタと改称し、軍政監部と呼ばれる権力の中枢を置いた。その他の官僚機構・統治組織、とくにそのヘッドオフィスの所在は、現在のところ仔細不明であるが、総務部、財務部、司法部、内務部などのヘッドオフィスがジャカルタにおかれた可能性は高い。一方でジャカルタの人種の構成をみると、日本軍は、バタビアの一部を構成していた近代的なオランダ人社会を崩壊させ、それまでのオランダ人と・オランダ語が占めていた位置に、日本人と日本語を横滑りさせたうえ、官僚機構中で日本人のみでは人数が足りない部分にインドネシア人を登用した（倉沢1992: 69-84）。日本軍政期が、植民地期の終わりであるか独立期の露払いであるかは検討する分野によって異なるが、首都機能の集中分散の側面では、独立期の露払いの可能性が大きい。ただしこの側面からの本格的バタビア研究は、この時期についても今後の課題である。

6. インドネシア共和国の首都—再び政経未分化な独占政体の首都として (1945 年—)

インドネシア共和国の独立によって 324 年ぶりに現地政権に回収された後のジャカルタについては、すでに膨大な量の概説や研究がある。そこで本章では 1) 政権の政治と経済の分離の度合い、2) 首都機能の集中と分散、そして 3) メスティソ的生活と社会関係の行方について簡単な指摘をする。かつてパタピアを形成した「異物」は去ったが、この「異物」残した可視化しにくい遺産が、いまだにジャカルタを拘束しているように考えられるからである。

6.1. スカルノ時代 (1950 年—1960 年代半ば)

1945 年に独立を宣言したインドネシアは、アメリカ等のバックアップによって、その後 1950 年に単一共和国として成立した。初代大統領スカルノは、当初、西側西欧世界の政党政治を志向していたが、50 年代後半の相次ぐ国内反乱を鎮圧するために「指導された民主主義」というスローガンをかけ、牽制しあう国軍・共産党・イスラム勢力を危うい土台とした独裁へと移行した。また対外的には東西中立の立場から、やがて反帝国主義・半植民地主義の左より路線へと傾斜して行った。このスカルノの統治スタイルは欧米の学者からは「家父長的重商主義的政治」と呼ばれたが、その構造は独占的利権政治であるといえ、権力の強化および歳入確保の主な手段は、工業に必要な原材料の輸入・国内での分配、貿易・販売独占などの居認可権を行使すること、および国営企業の経営であった (ロビソン 1987: 56-88)。

スカルノは、ジャカルタに対して雄大な都市計画を作成して整備に着手するとともに、外国人には悪趣味ととれる巨大な民族主義的彫刻を林立させた。そしてその一方で分散していた首都の行政機能をジャカルタの旧ウェルトフレーデン地区に集中させ、中央集権化を図った。貿易・援助利権の独占のためには、首都機能および権限の中央集権化、一極集中が必要であったのであろう (Abeyasekera 1987: 167-170)。

文化の側面をみると、マレー語から名称を変更したインドネシア語が国語とされ、ジャカルタの公式な共通語となった。また植民地期に土着の人々に愛された絵画、クロンチョン音楽などは国民文化として政府に保護されジャカルタには芸術センターなどが設立された。その一方で、メスティソ的生活およびこれが生んだ社会関係についてテイラーは、ヨーロッパ人の多くがインドネシアを出国したため、この時期にはすでに過去のものとなったと述べている。しかしインドネシア人の間ではどうであった

ろうか。スカルノはクロンチョンを愛し、派手好きで、首都ジャカルタを巨大な彫像で飾りたてた。夫人を複数持ち、愛人は数知れなかったが、夫人や愛人のなかには外国の政府や企業とスカルノとの関係を取り持つものもいた。スカルノのこれらの特徴は一般にはジャワ的価値観の発現と理解されている。しかしその一方でメスティソ的生活、社会関係との類似性をも想起させる。スカルノ研究の第一人者であった土屋健治が、スカルノの持つ明るさについて、「東南アジアの海域世界が持っている解放性と透明性とが、スカルノという個性のうちにみごとに共鳴しあっていた」（土屋 1993: 135）と述べていることは象徴的である。

6.2. スハルト時代（1960年代半ば-1998年）

国軍を権力基盤としたスハルトは、1965年の陸軍首脳殺害事件をきっかけに共産党勢力を武力で一掃した後、68年に大統領に就任した。スハルト政権は、いわゆる開発独裁体制としての特徴を持つ。彼は国軍の軍事力を背景に国民の政治参加を押し止めることによって、広域な多民族国家の政治的安定を保持し、自由主義陣営の外資を大量に導入することによって、経済開発に邁進した。そしてこの体制下では、政府官僚との特別な関係によってもたらされる許認可、譲与、融資、契約の特権的獲得が、インドネシア、特にジャカルタに暮らす人々に富をもたらす第一の要因となった（白石 1996）。

ジャカルタはスハルト体制下で外国援助・外資・石油資金・利権の集中する一極集中型の都市へと発展した。インドネシアの全通貨量の60%がジャカルタで出回っていると言われ、人口も90年代末には市域のみで1千万人に迫ろうとしていた。高速道路建設と郊外住宅地・衛星都市開発が郊外に向けて行われ、市街地は拡大した。行政機能の肥大化にともなう官庁のなかには郊外に移転するものもあった。しかし移転したのは重要度の低い役所であった（宮本・小長谷 1999: 第2, 3, 10章）。また国立インドネシア大学は、大学生を隔離するために郊外に移転させられたと言われている。

スハルト時代、とくにその後半には、メスティソ文化に起源をもつ国民文化は老人の好む文化として、若い世代に認識されるようになっていた。大都市、特にジャカルタの上流・中間層の生活様式はグローバル化、アメリカ化し、ジーンズ、ポップミュージックや映画、ファストフード店などに代表されるアメリカ文化を愛好するようになったためと考えられる。またジャカルタの共通語はインドネシア語であるが、開発政策下、外国援助・外資とともに多くの先進国の人々が流入した結果、米語が第

二の共通語といえる状況となった。そのほか都市中間層の間にはイスラム復興現象も広範にみられるようになった。19世紀に起源をもつメスティソ文化はその生命を終えつつあるように見えた（倉沢1996）。

では、この巨大国際都市で人々が取り結ぶ社会関係はどのようなものであったろうか。この時期の社会関係の考察はもはや歴史家の守備範囲を越えるので、雑誌・新聞等から得られる知識から、1～2の指摘をするに留める。スハルトは、スカルノとは異なり、自らの家庭をインドネシア的よき家庭として国民の範としたかったようである。しかしこの時期のジャカルタ、ひいてはインドネシアの権力関係は、17世紀のパタビア城塞都市内部の状態と不思議と類似したものであった。本稿第1章第1節の「VOC職員」を「軍人と官僚」に、「自由市民のオランダ人」と「数が少ない」を「一般のインドネシア人」と「人口の大部分を占める」に置き換えるならば、この文章はそのままスハルト時代に应用可能である。さらに政府官僚との特別な関係を築くためには、官僚の夫人に取り入ることが極めて重要であった。またジャカルタに赴任した白人とインドネシア女性が一定の期間だけ結婚生活をおくる形態もよく見られたようで、この状態をさす「契約結婚」（kawin kontrak）という言葉はジャカルタではよく使用される言葉であった。

7. おわりに

1997年のアジア経済危機を引き金として1998年にスハルトが大統領を辞任して独裁体制は終わりを告げた。その後より民主的と言われる短期諸政権のもとで、インドネシアでは地方分権が進んだと言われる。しかし首都ジャカルタはこの恩恵にあずかることはなく従来と同様の統治体制が維持された（木村宏恒名古屋大学教授のご教示）。文化的にはスハルト体制末期から都市中間層を中心としたイスラム復興現象がさらに進んでいるが、これは一方で宗教間の亀裂を増幅する可能性もはらんでいる。

17世紀の初めから今日まで、パタビア／ジャカルタはその属する政体に従って機能と形態を変化させてきたが、現在ジャカルタは、インドネシアの将来と同様、何番目かの転換期にさしかかっているように思われる。一極集中で巨大化したのちに開発独裁体制が崩壊したジャカルタは、例えて言えばオランダ東インド会社が崩壊したときのようなものである。今後首都機能分散、あるいは遷都さえも考える必要があるかもしれない。

ふりかえるならば、約390年の歴史の中でジャカルタ／パタビアが人々の目に繁栄

していると映ったのはそれほど長い時期ではなかったが、その時期は各地から人が集散し、交じり合う時期であつた。この見方は「自由主義時代」以降の植民地史家の視角から未だ脱却できない価値判断であるかもしれない。しかし次の点は確かであろう。この都市が生彩を欠く時代とは、この都市を首都とする政体が守りの体制に入り、領域内に対して独占的・暴力的権力を行使するときであった。より具体的には世界市場向け産物の生産を金貸し資本が独占し、権力と利権の一極集中によって人々の政治経済的自由を奪う、その程度が甚だしい時であった。

この後者の時期に属するスハルト期について、スハルト体制下の統治スタイルや官僚制におけるネガティブかつ非ヨーロッパ的な要素は、しばしばジャワ的な要素であると言われてきた。たしかにスハルト、そしてスカルノも、ジャワ人でありこれは一面の真理である。しかしこの考え方は2つの意味で非生産的であろう。言及されるジャワ文化とはいつのどこのジャワのものであろうか。古代までも視野に納めるならば、「ジャワ文化」全体がインド文化と土着文化との混交文化として成立したものである。第二に、この思考法はジャワ文化を悪者とすることでこの国に浸潤しているヨーロッパ的な要素のネガティブな機能を不問とする。ジャカルタ、ひいてはインドネシアのよりよい未来を展望するためには、現在の様々な問題、とくに権力関係や社会関係に関わる問題を、ヨーロッパ的な要素と土着の要素との不幸な絡み合いの堆積の末うまれた問題として考察する方が、より生産的な解決策を導き出せるのではないだろうか。さらにこのように考えれば、17世紀半ばのパタビアの社会状況がスハルト体制下の社会状況に似ていることも説明可能となると思われる。

参考文献

- Abeyasekere, Suzan
1987 Jakarta: A History. Oxford University Press.
- Blusse, L
1986 Strange Company: Chinese Settlers, Mestizo women and the Dutch in VOC Batavia. Dordrecht: Foris Publications. 302p.
- レオナルド・ブリュッセイ
1983 「オランダ東インド会社とパタビア（1619-1799）—町の崩壊の原因について—」。『東南アジア研究』。21-1。
- 加藤剛
1999. 「政治的意味空間の変容過程—植民地首都からナショナルキャピタルへ」。坪内良博編著『総合的地域研究を求めて 東南アジア像を手がかりに』。京大出版会。
- 倉沢愛子
1996 「開発体制下のインドネシアにおける新中間層の対等と国民統合」。『東南アジア研究』。34-1。

- 松尾大
1997 『バタビアの都市空間と文学』。大阪外国語大学学術研究双書 15。
- 宮本謙介
1999 『アジアの大都市 2 ジャカルタ』。日本評論社。
- 大橋厚子
1994a 「強制栽培制度」。池端雪浦『変わる東南アジア史像』。山川出版社。
- 大橋厚子
1994b 「ジャワ島プリアンガン地方におけるコーヒー輸送と現地人主張レヘントー 18 世紀初め～ 19 世紀初め」。『東南アジア研究』。32-1。
- 大阪市立大学経済研究所編
1989 『世界の大都市 6 バンコク・クアラルンプル・シンガポール・ジャカルタ』。東京大学出版会。
- ロビソン、リチャード
1987 『インドネシアー政治・経済体制の分析一』。木村宏恒訳。三一書房。
- 白石隆
1996 『新版 インドネシア』。NTT 出版。
- Taylor, Jean Gelman
1983 The Social World of Batavia: European and Eurasian in Dutch Asia. The University of Wisconsin Press.
- 土屋健治
1991 『カルティニの風景』。めこん。
- 土屋健治
1993 「スカルノ」。『英雄たちのアジア』。別冊宝島 EX。
- 土屋健治・加藤剛・深見純生
1991 『インドネシアの事典』。同朋舎。
- 和田久徳・森弘之・鈴木恒之
1977 『東南アジア現代史 I 総説・インドネシア』世界現代史 5。山川出版社。